



本は待ってくれる

市瀬 英昭

「本は、ゆっくりだけど、心の一番奥に届くメディア」。以前、ある雑誌の中で見つけた言葉です。大手出版社の取締役の職にあった女性の言葉として引用されていました。こういう信念をもって出版の仕事をする方は幸せだと思います。とても印象深い言葉だったので、授業の中でよく学生の皆さんにも紹介していました。加えて、わたしは、かれらに、本を「読む」とは「繰り返し読む」の意味で、一回だけ読むのは読むとはいわず「見る」と言います、とユーモアを込めて伝えていましたが、これは本音です。わたし自身のささやかな体験からもそう言えます。

私事になりますが、大学一年生になったばかりの4月のはじめ頃、わたしは、少し大人になった気分で、当時話題になっていた遠藤周作の『沈黙』を読んだことがあります。正確に言えば、読もうとしたことがあります。張り切って読み始めましたが、読み進んでいくうちに気持ちが暗くなり、とうとう途中で読むのを断念してしまいました。当時のわたしには重いテーマだったのだと思います。そして、しばらくはそのことを忘れていました。それから、5、6年たって、哲学科を卒業し神学科に編入した頃だったでしょうか、自分の本棚に置いてあった『沈黙』を手にとって、少し懐かしく思いながら、何気なしに読んでみました。そうすると、驚いたことに、初めて読んだ頃の違和感がなくなっており、何か「わかる気」がしたのです。難しいテーマであることに変わりはありませんでしたが、難しいけれど大事なことが書いてある、と感じました。それは、不思議な感覚でした。そのとき、確かに「本は待ってくれる」ということも実感しました。「古典」の意義もそこにあると思われまます。

ところで、通常「古典」と訳される「クラシック」という言葉自体には古いという意味はないようです。それは、良質のもの、優れたもの、第一級のものを意味すると言われます。それに触れると自分の中に秩序が回復するような、わたしの中の「何か」が健やかになるような、そんな手応えを感じさせるものがクラシックと呼ばれるようです。そのような出会いを待ちながら、『ライネルス中央図書館』に置かれている多くの本たちも、わたしたちを「じっと、待っている」のではないのでしょうか。

2025年に神言修道会が創立150周年を迎えたこともあり、今回のテーマは「神言会神父と出版：明治・大正・昭和初期」とされています。神言会会員は派遣された国、地域の言語をまず学び、その地の習慣に溶け込むことが大原則となっています。しかし、中国へ派遣されたヨゼフ・フライナデメッツ神父がまさにそうであったように、それは大きな苦勞を伴います。かつて日本へ派遣された本会の宣教師たちが、教会や学校での必要に応じて、慣れない日本語で書物や冊子を発行した—もちろん日本人の協力のもとに—例を見るにつけ、彼らの苦勞と日本への愛を思います。彼らの後に続き、南山学園がこれからも、いろいろな形で求める人たちの「心の一番奥に届くメッセージ」を送り続けることができるようにと願っています。

(ICHISE, Hideaki : 神言修道会司祭)

神言会神父と出版：明治・大正・昭和初期

はじめに

1875(明治8)年9月8日、オランダのシュタイルという小さな町でカトリック修道会「神言会」は誕生した。神言会のWebページには次のような記載がある。

神言会の創立者、アーノルド・ヤンセンは、1861年に司祭に叙階されてから、高校教師として数学などを教えました。しかし、「み言葉を全世界に広める」という外国宣教に対する関心が次第に強まり、教師職を辞して布教活動に専念することを決意しました。ところが、当時ドイツでは反カトリック運動が激化し、国内におけるカトリックの活動はかなり制限されていたため、アーノルドは国外にドイツの宣教神学院を創るように、出版活動を通して人々に呼びかけました。これは、何も彼自身が宣教神学校を創るという意味ではなく、「創るために協力しましょう」という呼びかけだったのですが、苦しい時代の中でこのような提案は誰にも相手にされず、当時の香港司教ライモンディのアドバイスを受け、ついに自分で宣教神学院を設立する決意をしました。

(神言会Webページより抜粋)

Webページには、創立者であるアーノルド・ヤンセン神父(JANSSEN, Arnold SVD., 1837-1909)が布教のために最初に選んだ方法が出版活動であったことが記されている。この出版活動は、1874(明治7)年1月にヤンセン神父が創刊した一般信徒向けの月刊誌『Der Kleine Herz-Jesu-Bote(聖心の小使者)』のことであり、この月刊誌はその後の神言会創立に大きな役割を果たした。1903(明治36)年に『シュタイル宣教の使徒』と改称され、ナチス党によって1941(昭和16)年に発禁となるまで続き、神言会の活動を支えたのである。

中国で長年宣教したヨハン・ヴァイク神父(WEIG, Johann SVD., 1867-1948)、ウィーンの教員養成学校で教鞭をとっていたアントン・チェスカ神父(CESKA, Anton SVD., 1877-1951)、そして叙階したばかりのヨゼフ・ゲルハルト神父(GERHARDS, Joseph SVD., 1881-1939)ら3名の神父は、神言会から初めて日本に派遣され、1907(明治40)年9月8日に日本に到着した。この日は、神言会の創立から33年目の創立記念日であり、ヤンセン神父はこの偶然を大変喜んだそうである。神言会は、当初は仙台にカトリック学校を設立して教育事業を行うことになっていたが、日本の布教に不慣れな新しい修道会への否定的な見解もあり、任されたのは保守的な地域で教勢のあまりかんばしくない秋田・山形・新潟三県の布教であった。続いて仏教勢力の強い石川・福井・富山の北陸三県の布教も担当することになり、神言会の神父たちの活動は多大な労苦を伴うものであった。1912(大正元)年に秋田・山形・新潟・富山・石川・福井が新潟使徒座知牧区(後の新潟教区)として編成され、1909(明治42)年に来日していたヨゼフ・ライネルス神父(REINERS, Joseph SVD., 1874-1945)が初代知牧区長に任命された。1922(大正11)年に愛知・岐阜・富山・石川・福井が名古屋使徒座知牧区(後の名古屋教区)として編成され、ライネルス神父が初代知牧区長に任命されて新潟使徒座知牧区長と兼務し、この兼務は1926(昭和元)年にチェスカ神父が第2代新潟使徒座知牧区長に任命されるまで続いた。そして1930(昭和5)年には岐阜の多治見に神言修道院(多治見修道院)が開設され、神言会の活動の拠点は新潟から多治見に移ることになる。

明治・大正期のカトリック出版は、外国人の神父らの手によって始められ発展したと言っても過言ではない。神父たちは、派遣された地域の特性にあわせて、あるいはそれぞれの布教スタイルにあわせて出版活動を始めたのであろう。出版活動を支えた資金は、神父らが個人的に呼びかけた故国からの支援に頼ることも多かったようである。また神父や信徒らが日常生活の中で多くの不便に耐えながら節約して蓄えたお金も拠金となった。この時代の出版は、企画、執筆そして出版まで個人によって行われることが多く、出版社ではなく、地方の教会や個人が出版する例も珍しくなかった。本学カトリック文庫にも奥付に、明治・大正期のカトリック教会聖堂を表す「…天主堂発行」とある多くの書物が残されている。なお本稿は、奥付等の記載をそのまま記述する際は「…天主堂」としているが、それ



礼拝堂と150周年の垂れ幕
(神言会ローマ総本部)

以外は「…教会」と記すなど表記の使い分けをお許しいただきたい。

本稿では、神言会より最初に日本に派遣されたチェスカ神父が新潟に開設した印刷所のこと、そして秋田・山形でのフィンゲル神父による青年布教のための出版活動、神言会の新たな拠点となった岐阜・多治見に近い岐阜教会でのブリカ神父の母と子のための出版活動などを通じて、この時代の神言会の出版活動を追ってみたいと思う。

1. チェスカ神父：新潟「聖ヨゼフ活版所」の開設と『少年聖書』

(1) チェスカ神父と新潟の大聖堂

前述のとおり、チェスカ神父は、1907(明治40)年に神言会より最初に日本に派遣された3名の神父のうちの一人である。1877(明治10)年にオーストリア南部のトリエステ教区に生まれ、1905(明治38)年に司祭に叙階された後、2年間語学を教えてから来日した。秋田で日本語を学習後、1908(明治41)年に秋田から新潟に転任し、新潟市内に設立された「山の教会」の司祭に着任、1926(昭和元)年から1941(昭和16)年までは新潟使徒座知牧区長を務め、1913(大正2)から1934(昭和9)年の間は新潟教会の主任司祭も兼任していた。

知牧区長在任中には新潟大聖堂の建設に携わっている。オーストリア皇室に知人を持つチェスカ神父の尽力により、その皇室の援助を仰いで新潟に新聖堂を建設することが企画され、献堂式にはオーストリア皇太子を招待する話まで出ていたそうである。ところが1914(大正3)年に皇太子がセルビア人に暗殺された、いわゆるサラエボ事件をきっかけに第一次世界大戦が勃発し、資金を得る望みが消えて建設は後回しにされたことが『神言修道会来日百周年記念誌』に記されている。その後、チェスカ神父は海外からの支援を断念して日本で募金を開始、新潟教会の青年会や婦人会も積極的に協力して、1923(大正12)年9月の関東大震災前には東京の信者たちからもすでに2千円以上の募金が集められたそうである。結局、所有地の売却などにより資金が整い、1926(昭和元)年12月に、秋田・山形・新潟三県のカトリック教会を管轄する新潟使徒座知牧区の中心となる新聖堂の建設に着手した。

ロマネスク様式とルネッサンス様式とを折衷した木造の新聖堂の設計者は、南山学園ライネルス館を設計したスイス人のマックス・ヒンデル氏(HINDER, Max, 1887-1963)である。1927(昭和2)年9月に完成した大聖堂は屋根の上までが10メートルほど、五層からなる双塔の頂点までは22.7メートル余りに達し、明治以来「異人池」と呼ばれてボートが浮かべられる池のほとりに、大きなポプラ並木に囲まれて建つ美しい大聖堂はその後度々絵画や詩の題材になったそうである。

その後1941(昭和16)年頃には活動拠点を岐阜の多治見へと移し、1951(昭和26)年4月29日に名古屋の神言神学院で没した。チェスカ神父は実に73年の生涯の32年間余りを、新潟を拠点として過ごしたことになる。

(2) 聖ヨゼフ活版所の開設と出版への取り組み

明治末年から大正にかけての頃は、全国的に一つの思想的転換期(大正デモクラシー)であった。『新潟カトリック教会百年の歩み』によれば、その流れを受けて新潟でも多くの青年たちが新しい思想を求めて教会を訪れ、人生、政治、社会などの諸問題について盛んに論じ合い、外国人神父たちとの交流を求めたという。青年たちの多くが思想問題に興味を示しているのを見たチェスカ神父は印刷所の開設に着手する。

青年たちの多くが思想問題に興味を示しているのを見たチェスカ神父は、大正3年3月15日(四旬節第3主日)、信者である佐藤富五郎氏の協力を得て、東大畑通りのバラック教会内に聖ヨゼフ印刷所(ママ)を開設した。印刷所と言っても、初めの数年間は小さなものしか印刷できなかったと思われるが、それでも7年暮には、チェスカ神父著『少年聖書』を発行販売して、声誌にも広告を出し、広くカトリック界にその存在を知られるに至った。しかし、翌8年に敗戦国ドイツの宣教師に対する統制がきびしくなるに及んで、廃止されてしまった。(中略)廃止されたカトリックの印刷所も、大正9年に生命ノ木社出版部と名称を変更し、佐藤富五郎氏宅を中心にして寄居町で再開され、11年1月にはチェスカ神父の『少年聖書』第3版を、同年12月には富山市の黒黒康正氏が訳した『基督の模倣』を、その後はフィンゲル神父の諸著作を、次々と新潟天主堂から発行した。

(新潟カトリック教会編『新潟カトリック教会百年の歩み』より抜粋)

チェスカ神父は布教のためにいくつかの書物を出版している。今に残る出版年の最も古い資料は上智大学中央図書館キリシタン文庫が所蔵する『子らよ、我に來れ：幼年者の告白並に聖體拜領の祈禱』(チェスカ編、1913)で、

新潟市内の小林活版所で印刷、「新潟天主教会」から発行されている。聖ヨゼフ活版所の開設は翌年の1914(大正3)年のことである。はしがきには「主に対する愛熱の情を燃やし、能ふ限り熱信(ママ)に、敬虔に、一層主に近づき、一層親しく主と交はるやう、心より楽しみ勇んで、尊い此二つの秘蹟を受くるに至らしめなければならぬ。それには成るべく平易な、そして子供らしい言ばを以て唱へられる祈祷文が頗る必要である」とあり、この本はこれから本格的に始まる布教のためにどうしても必要なものだったのであろう。

印刷者として奥付に記されている「小林二郎」は山岡鉄舟の門人で、明治維新とともに新潟に戻り印刷所を開業し『僧良寛歌集全』や『僧良寛詩集全』などを発行した地元の著名な文人であった。神言会の初期の出版に小林氏がどのような経緯で協力することになったかは定かではないが、良寛の清貧な生き方とカトリック神父たちの生き方に重なるものを見たのだろうか。

続いて1914(大正3)年に『少年聖書』初版(ア・チェスカ・京谷涼二編著)が出版されたようだが、残念ながらカトリック文庫には所蔵がなく、他でも見つけることができなかった。『少年聖書』は1918(大正7)年に再版、1921(大正10)年に出版された訂正3版の印刷・発行所は「聖ヨゼフ活版所」から名称変更した「生命ノ本社出版部」となっている。訂正3版は、長崎純心大学早坂記念図書館が所蔵している。

聖ヨゼフ活版所の開設に協力した信徒、佐藤富五郎氏はチェスカ神父が最初に洗礼を受けた信徒であり、当時の記録から「旭櫻舎(活版部)」を営んでいたようなので、もともと印刷業を生業にしていたのかもしれない。

43頁の小冊子『洗禮之儀式』(チェスカ訳; 小黒康正筆, 1918)は富山の伝道師、小黒康正氏の協力によるもので、チェスカ神父は他にも坂井栄吉伝道師や田中伝道師らに助けられ働いていたそうである。キリスト教徒になるために教会が執り行う「洗礼」の儀式について書かれている。カトリック文庫に所蔵する資料で、聖ヨゼフ活版所で印刷されたものとしては最も古いものと思われる。



『洗礼の儀式』(印刷所: 聖ヨゼフ活版所)

1920(大正9)年にはトマス・ア・ケムピス著; 小黒康正訳『基督模倣』が聖ヨゼフ活版所で印刷、「(新潟)天主堂」で発行されている。奥付によれば、この本の校訂はチェスカ神父と共に神言会より初めて日本に派遣されたゲルハルツ神父が行い、ライネルス神父の名前で発行されており、チェスカ神父の名は見られない。原著は1418年に書かれた『De imitatione Christi et contemptu omnium vanitatum mundi』で「第二の福音書」「中世の最高の信心書」とも言われ、聖書に次いで霊的修練の書として全世界で読まれているキリスト教修養書である。

『小児用告白聖体拝領ノ祈祷』(チェスカ著, 1923)は33頁の小冊子で、『子らよ、我に來れ』が元になっていると思われるが内容は大きく見直され、前者が平仮名と漢字で祈りのことばだけが書かれているのに対し、本書はカタカナと漢字で「聖堂ニ這入ッたら、先ヅ聖櫃ノ内ニ居被ル イエズ様ヲ平伏シテ拝ミ、『天ニ在ス、慶タシ、使徒信経』ヲ一偏ヅオ誦ヘナサイ」と祈りの言葉だけでなく動作も含めて、易しい言葉遣いを選んで書かれている。布教の過程で、子供たちに対してさらに易しくまた詳しく説くことが必要と思われたのだろう。このように聖ヨゼフ活版所で印刷されたこれらの書物は、教会での儀式を行う上で、また布教のために不可欠なものだったに違いない。

本学で所蔵している『少年聖書』訂正4版(ア・チェスカ・京谷涼二編著, 1927)も聖ヨゼフ活版所で印刷され、「(新潟)天主堂」で発行されている。頁数が245頁に及ぶ挿絵入りの美しい本で、少年少女のために平易な言葉で書かれた旧約・新約聖書は、教会に通う子供たちにぜひ読んでもらいたい本であっただろう。

ところでチェスカ神父は新潟に開設した印刷所をなぜ「聖ヨゼフ活版所」と名づけたのであろう。チェスカ神父が新潟に派遣される直前に建てられた「山の教会」は聖ヨゼフにささげられた教会で、翌年には聖ヨゼフ伝道学校も併設されていることから、新潟では新しい施設に「聖ヨゼフ」の名を捧げることはごく当たり前だったのかもしれない。ちなみに「聖ヨゼフ」は新約聖書に登場するマリアの夫の名であり、大工を生業としていたとされる。あるいは次のような別の理由も考えられる。

1907(明治40)年来日した神言会の3名の神父たちをあたたく出迎え、慣れない地での活動を支えたのは、それまで新潟での布教活動を担っていたパリ外国宣教会のマトン神父(MATHON, Remi Louis, 1869-1945)であった。マトン神父は新潟・秋田・山形・鶴岡など神言会がその後を担当する地域で活動を行っており、神言会への円滑な引継ぎのために果たした役割は大きかった。マトン神父が1912(大正元)年に出版した『ルルドの出来事: 奇妙なる出現及び平癒』では、著者・発行者であるマトン神父の住所は新潟教会の住所「新潟市東大畑通一丁目六四四番地」であるが、印刷所は大阪市東区左官町の聖若瑟(ヨゼフ)教育院活版部となっている。聖若瑟教育院活版

部はパリ外国宣教会が大阪玉造に設立した施設「聖若瑟教育院」に併設された印刷所であることから、新潟での聖ヨゼフ活版所の開設にあたっては、神言会に活動を引き継いだマトン神父を介して、聖若瑟教育院の手助けを得られたのかもしれない。マトン神父は『ルードの出来事』を上梓したのち同年12月には神言会への引継ぎを終え、新潟教区を去ったのである。

1914(大正3)年に始まった聖ヨゼフ活版所は、中断を挟み、一時的に名称を変更し、場所を変えて続いたが、1927(昭和2)年以降のいずれかの時期に閉鎖したらしい。『新潟カトリック教会百年の歩み』の記載とは異なるところもあるが、カトリック文庫に所蔵する資料、上智大学中央図書館や長崎純心大学早坂記念図書館が所蔵する資料の奥付で確認できる聖ヨゼフ活版所の歴史はおおよそ以下のとおりである。確認できた聖ヨゼフ活版所の最後の印刷物は、チェスカ神父の『少年聖書』(訂正4版, 1927)であった。

< 聖ヨゼフ活版所の歴史 >

1914(大正3)

「聖ヨゼフ活版所 住所:新潟市寄居町 工場主:佐藤富五郎 創業年:大正3年4月」
* 農商務省工務局工務課編纂『工場通覧 大正10年11月』より

1918(大正7)

聖ヨゼフ活版所:新潟市寄居町(図書館前)
佐藤富五郎:新潟市学校町通三番町

- ・2月『洗禮之儀式』(チェスカ訳)印刷 (新潟天主公会発行)
- ・10月『少年聖書』訂正再版(ステシエン編著)印刷 (教友社発行)
- (暮にチェスカ神父著『少年聖書』を発行販売して、声誌にも広告を出し、広くカトリック界にその名を知られる。)

1919(大正8)

(敗戦国ドイツの宣教師に対する統制が厳しくなるに及んで廃止された。)

1920(大正9)

- ・10月『基督模倣』(小黑康正訳)印刷 (新潟天主堂発行)
- (生命の木出版部と名称を変更し、佐藤富五郎氏を中心にして寄居町で再開した。)

1921(大正10)

生命ノ木社印刷部:新潟市寄居町(中通)
佐藤富五郎:新潟市学校町通三番町

- ・12月『少年聖書』訂正3版(ア・チェスカ・京谷涼二編著)印刷 (チェスカ発行)
- ・以降、1923年6月までの間に名称を「聖ヨゼフ活版所」に戻す。

1923(大正12)

聖ヨゼフ活版所:新潟市寄居町(343)(中通)
佐藤富五郎:新潟市学校町通三番町(5332)

- ・6月『小児用告白聖体拝領ノ祈祷』(ア、チェスカ著)印刷 (チェスカ発行)
- ・12月『エリヤの犠牲』(フィンゲル著)印刷 (新潟天主堂発行)

1926(大正15)

聖ヨゼフ活版所:新潟市西堀通四番町(寺浦)
佐藤富五郎:新潟市学校町通三番町

- ・7月『世の光』(フィンゲル著)印刷 (新潟天主堂発行)
- ・11月『エリヤの犠牲』再版(フィンゲル著)印刷 (山形天主堂発行)
- ・12月『公教祈禱集』印刷(新潟天主堂編・発行)

1927(昭和2)

- ・5月『少年聖書』訂正4版印刷(ア・チェスカ・京谷涼二編著)(新潟天主堂発行)

(3) 3冊の『少年聖書』

カトリック文庫には3冊の『少年聖書』を所蔵している。ステシエン編著(訂正再版, 1918)、前述したア・チェスカ・京谷涼二編著(訂正4版, 1927)そしてライニルケンス訳(1952)である。

<本学が所蔵する3点の『少年聖書』>

	①	②	③
編著・訳	ステシエン編著(パリ外国宣教会)	ア・チェスカ/京谷涼二編著(神言会)	ライニルケンス訳(神言会)
初版印刷日	1914.4.8	1914.4.8	1952.6.10
初版発行日	1914.4.12	1914.4.12	1952.6.15
所蔵版	訂正再版(1918)	訂正4版(1927)	初版
(所蔵版)印刷者	佐藤富五郎	佐藤富五郎	野田みつ
(所蔵版)印刷所	聖ヨゼフ活版所	聖ヨゼフ活版所	ミツワ印刷(株)
(所蔵版)発行所	教友社	(新潟)天主堂	エンデルレ書店
(所蔵版)頁数	270	245	152
(所蔵版)定価	四捨銭	七捨銭	120円
底本(所蔵版)	不明	不明	クウライネ・シュールビヘル (ヘルダー出版社最新版)

チェスカ編著の『少年聖書』には「はじめに」が付されており、そこには以下のような言葉が記されている。

此の本を愛する少年少女諸君に贈ります。此の本は天主様の御啓によって書かれた本である聖書を、皆さんに解り易い様に、簡単に書き改めたものであって、此の中には聖書と同じく沢山のよい霊の賜物が隠されてあるであります。(中略)尚此の本は少年聖書と名づけてはありますが、少年少女諸君計りではなく、一般信者及び求道者の方々の魂の糧にも充分なり得るだらうと信じます。



『少年聖書』3種

ステシエン編著の『少年聖書』(訂正再版, 1918)は聖ヨゼフ活版所で印刷され、東京の教友社から発行されている。ステシエン神父(STEICHEN, Michael A., 1857-1929)は、神言会の来日よりも20年も早い1887(明治20)年にパリ外国宣教会より派遣され、各地で布教活動を行う傍ら雑誌編集長を務め、雑誌『聲』の主筆として健筆をふるっただけでなく、キリシタン研究の分野でも先駆的な役割を果たした著名な神父である。1912(明治45)年にはカトリック系出版社「教友社」を創立し、この「教友社」はステシエン神父が亡くなった後、岩下壮一神父によって引き継がれ、その後カトリック中央出版部に継承された。

『聲』は明治前半から今に続く最も著名なカトリック雑誌で、1891(明治24)年に京都で創刊され、教会内各信者の連絡、報道の機関誌としての役割を果たしていた。1899(明治32)年に東京の三才社に発行所を移し、1911(明治44)年に東京・長崎・大阪・函館の四教区公認の機関誌となる。その後は前述の教友社などに発行所が変わるなど紆余曲折を経ながら続いたが、2002(平成14)年をもって休刊となっている。

所属する修道会が異なるステシエン神父とチェスカ神父の『少年聖書』の初版は、どちらも1914(大正3)年4月8日が印刷の日付で、発行日は4月12日となっている。章立ては異なっているものの、同じ挿絵が使われている。しかしながら挿絵の挿入箇所は違っているなど、似て非なる二つの『少年聖書』が同日に印刷され、別々の場所から同日に発行されたのはなぜなのだろうか。

神言会のフーベルト・ライニルケンス神父(REINIRKENS, Hubert SVD., 1893-1976)訳の『少年聖書』は、前述の二つの聖書が出版されてから40年近く経って出版されたもので、この本には底本も記載されている。付されている「この本を読む人へ」の中から一部を抜粋して紹介したい。

聖書は、およそ字の読める人は必ず読まなければならない本であるが、少年少女諸君にとっては大きすぎるし、又、わかりにくい所も大変多い。少年聖書はその名の示す通り、特に年少の人たちにわかりやすいようにかんたんに書かれたもので、神言会の故モンセニヨル・チエスカ師によって、大正三年に編修されたものであるが、昭和二年第四版発行後は絶版になってしまった。戦後、日本でキリストの御教えに対する関心が急に深まるようになって、こういう本の発行も強く望まれて来たので、ここにふたたび故師の遺業をついで、新しい「少年聖書」を編修した。

ライニルケンス訳『少年聖書』の発行元である「エンデルレ書店」も「教友社」と同様にカトリック系出版社である。創立者のエンデルレ・ルーベルト氏(RUPERT, Enderle)は1935(昭和10)年にドイツのヘルデル出版社(フライブルグ)から『カトリック大辞典』編集連絡員として来日し、翌年東京の大森で欧亜書房ヘルデル代理店として洋書輸

入業務を開始した。ライニルケンス神父が『少年聖書』のために使用した底本は独ヘルデル社（表記はヘルダー出版社）のものである。

（4）チェスカ神父の日本への思い

『新潟カトリック教会百年の歩み』には信徒らによるチェスカ神父の思い出が綴られている。チェスカ神父が最初に洗礼を受けた佐藤富五郎氏とその家族の洗礼記録写真をドイツの母親に送り、母親は外出の時に必ずその写真を持ち歩いて知人に見せていたという話や、他にも新潟の医学生生のドイツ語論文の推敲を頼まれていた、6か国語を話した、日本語が非常に上手で重厚な文章を書いた、せっかちなところもあった、大きな体で心の優しい人だった、また生活は非常に質素で清貧であり、教区長と新潟教会の主任司祭を兼ねていたため多忙を極めていたことなど多くの思い出が寄せられている。

『新カトリック大事典』のチェスカ神父の項目には、「博識と独特のユーモアにより、キリスト教信仰を信徒の心に深く定着させた。（中略）配下の宣教師や信徒の意見を積極的に吸い上げて生かす話し合いの精神にも優れ、教区内の信徒活動を大いに盛り上げた」とある。

小川仁氏の「書家・高橋松顧と修道士・アントン・チェスカ」（2022）は、書家であり鑑定家でもある高橋松顧氏とチェスカ神父を巡るバチカンへの古写経献呈について考察した論文である。そこには、新潟において幅広い知見のもとに活動していた高橋氏がバチカンへ古写経を献呈するにあたり、チェスカ神父が尽力していたことが記されている。またその論文には、法哲学者の尾高朝雄氏との共著によりウィーンで出版した『Von Japan und seinem Volke（日本とその人々）』（1932）の中に、チェスカ神父が「Aus dem Lande des Nebeneinander（共存の地より）」というエッセイを寄せて、自らの日本への思いを述べていることが紹介されている。

日本の社会生活には美しさがある。しかしながら列島という地理的位置の問題や、言語としても習得が困難である故に、他に属する人びとには理解されることがない。日本人は、言うなれば主人たる皇帝とともに、ひとつの大家族を形成しており、どこでも同じように作り上げ、どこでも同じものを食べ、どこでも同じような祭りに興じるのである。日本の強みは、まさにそこにあるのであり、それはまるで、家庭も家庭生活も神聖とみなされ、国家生活の基礎として認識されているようなものなのである。

チェスカ神父は32年間の多忙な新潟での生活で、そして生涯を終えるまでの長い日本での生活のなかで、信徒だけではなく、多くの日本の人々と交流を持ち、日本と日本人をより深く理解しようと努め、強い信頼関係を築いていたのであろう。

2. フィンゲル神父：秋田教会、そして山形教会へと続く青年布教のための出版活動

（1）秋田教会での小冊子出版

フランツ・フィンゲル神父（FINGER, Franziskus Sal. SVD., 1884-1942）は旧東ドイツに生まれ、28歳の時に神言会の司祭に叙階された。叙階から1年後の1913（大正2）年に来日し、新潟で日本語を学んだ後、金沢教会、富山教会を短期間で異動している。1920（大正9）年頃までは富山教会に在籍していたようであるが、その後1924（大正13）年後半に秋田教会の助任司祭としての記録が資料に記されるまでの間の所在はよくわからない。『秋田カトリック教会創立百周年記念誌』には、秋田教会の助任司祭として、信徒の協力を得て執筆活動を行っていたという記録が残されている。



フィンゲル神父著作 6 冊

1923（大正12）年に、フィンゲル神父は最初の著作物『エリヤの犠牲（いけにへ）』を「新潟天主堂」より発行した。はしがきの日付は「1922年3月24日」となっているので、この本が執筆された時期は、秋田教会着任前の所属がよくわからない時期と重なっている。そし

て、秋田教会着任後の1925(大正14)年に『十字架の勝利』『善と悪』、1926(大正15)年に『汝磐なり』『世の光』と次々に5冊の小冊子を「新潟天主堂」より発行する。この頃、フィンゲル神父は神言会が最初に布教を始め信徒数が最も多い秋田教会にいたはずであるが、新潟使徒座知牧区の拠点である新潟教会近くには神言会の印刷所である「聖ヨゼフ活版所」があったので、そこから発行したのかもしれない。あるいは所属がわからない時期にフィンゲル神父は新潟教会にいたのかもしれない。いずれにしても最終的には、この5冊の小冊子を合本し金文字上製箱入として新たに『天の道』というタイトルを付して出版しており、出版にかかる並々ならぬ意欲を感じさせる。さらに、それまでに出版した5冊の小冊子をまとめて紹介し、キリストおよびキリスト教への案内とすべく『天の道「総論」』(1933)という小冊子まで出版した。本学が所蔵する『天の道「総論」』(3版, 1937)には、次のように5冊の小冊子が紹介されている。

「世の光」は実はキリストの略伝であって、只基督教の梗概を表すのであります。(中略)人類の始めの歴史を書いた「善と悪」、及び神の存在と其の働に就て特にイスラエル民族の歴史に現れたまを書いた「エリヤの犠牲」は両冊子の歴史的内容から自然、世界歴史の中心である「世の光」の前に組み込みましたが(ママ)、キリスト御自身で定め給うたカトリック教会の本質、現代までの歴史の発展を書いた「汝磐なり」及び世の終と人間の四終を書いた「十字架の勝利」とは、両冊子の歴史的内容に従って「世の光」の後に組み込みました。そしてこの「天の道総論」はその性質から叢書中の「善と悪」の前に置くべきものであります。

『カトリコス』No.35(2020)では、秋田県の横手教会で横手・秋田・山形の鶴岡の三教会の青年連盟「アヴェの友会」を立ち上げ、1930(昭和5)年に月刊誌『アヴェ』を発行したテオドル・ガブリエル神父(GABRIEL, Theodor SVD., 1882-1962)について紹介している。フィンゲル神父が秋田教会の助任司祭であった時期の主任司祭はガブリエル神父である。ガブリエル神父が『アヴェ』を発行したのは秋田教会を離れてからのことであるが、発行の目的は「青年自身の修養と思想の錬磨にあるので、言ひ換へれば、将来の精神戦のリーダーを養成する」ことであると明言しており、内容も当時の一般青年たちの興味を起こさせるものが多く、カトリック信者だけでなく広く青年たちの間で読まれていたようである。秋田教会において、助任司祭のフィンゲル神父が主任司祭のガブリエル神父の影響を少なからず受けていたと考えると、活発な出版活動やその後の山形教会での青年布教への取り組みも想像に難くない。

いくつかの資料から浮かび上がるフィンゲル神父は、「日頃いつも部屋に閉じこもって執筆されていた。食事の時もお一人だった」というように、寡黙で、孤独を愛し、あまり外出もせず、読書と著述に多くの時間をさき、自室の掃除も人に任せず、食堂に鍵をかけてひとりで食事をとるような人物であったようだ。一方、ガブリエル神父は「情熱的で、説教では祭壇上から文字通り獅子吼して信者の布教上における消極性、不協力を叱咤し、又愛について語るときは涙を浮かべ、人の心に強く訴えるものがありました」とあり、2人の性格は全く異なっている。

(2) フィンゲル神父と日本人の信徒たち

『秋田カトリック教会創立百周年記念誌』には、秋田教会でフィンゲル神父の執筆活動を支えた人物として安田忠治氏の名前が挙げられている。安田氏は秋田県仙北郡中湊川村出身で旧家安田家の長男として生まれたが、幼少期右手にやけどを負い農家を継ぐことができなくなってしまった。安田氏とカトリックの出会いは、秋田中学校在学中に開催された博覧会で、教会が見物人に配ったりギョル神父の『真理の本源』という本であったという。学問の道を志して東京の一高に進んだある年の夏休み、帰省中の秋田でドイツ語の本の読解のためにドイツ人の神父のいる教会に通うようになり、そのうちにドイツ語の『カテヒスムス(公教要理)』と『ビブリッシュ・ゲシヒテ(少年聖書)』を教材として渡されて一緒に読み進めることになったそうである。勉学のために教会との関係が続けるうちに信仰に目覚め、1910(明治43)年23歳の時に秋田教会で受洗した。東京帝国大学時代にはカトリック青年会の副会長を務め、岩下壮一会長(後の司祭)を助けて活動したという記録も残されている。後に秋田地方判事、仙台控訴院、旅順高等法院などを奉職された。本学が所蔵する『エリヤの犠牲』(再版, 1926)には翻訳者として、『汝磐なり』(再版, 1928)には修訂者として奥付にその名前が残されている。

いずれにしても外国人の神父らが日本語の書物を出版する際には、日本人の助けが必要であったことは疑いようもない。フィンゲル神父は日本語で話すことは苦手であったようであり、書くことは話すことより得意であったとしても、知識がある日本人の信徒らの助けは心強かったことであろう。神父が導くキリスト教の教えと、日本人信徒らの

執筆支援の双方向の関係がフィンゲル神父の青年布教の根底であったのかもしれない。『エリヤの犠牲』（再版、1926）の奥付には、先に記したように翻訳者として安田氏の名前が記されているが、はしがきでは「この度の再版の修訂につきましては、日高さんの力添へを頂きました。また私の五つの小冊子について多大の力を籍（か）して頂いた安田さん、倉橋さん、高橋さんには此の機会に深く感謝の意を表したいと思ひます」と謝辞を述べている。高橋幸之助氏の名前は『世の光』（1926）の奥付に、聖心愛子会経営の聖心医院の医師、倉橋泰次郎氏の名前は『善と悪』（再版、1927）の奥付に、それぞれ修訂者として記載されている。

フィンゲル神父は5冊の小冊子を書き上げた後の1926（大正15）年10月、新たに建立した山形教会堂の献堂式直前に、第6代主任司祭として山形教会に着任した。1928（昭和3）年4月11日発行の『カトリック・タイムス』には山形天主堂全景の写真と共に、次のような記事が載っている。

一昨年度御堂新築せられ、燦爛たる金色の十字架は峨々として市の中央にそびえ、道徳の本源たるべき聖堂の所在を世人に紹介せしむるに至り、爾来信徒の信仰も堅実に、今や其数六十有余名に達し、主日に於ける参拝者も益々多きを加へ、殊に求道志願者も、漸く増加し来る。御復活祭には、三、四名の受洗者を出すに至れる機運に向へり。且つ又、青年会及び婦人会に於いても、自発的に教理及び談話会、祈祷会を催ふし、大いに其活躍を試みつつあり。

そして1930（昭和5）年には山形教会敷地内に2室からなる青年集会場21坪が建てられ、青年会や婦人会による教理研究・懇談会、祈祷会などの活動拠点となった。

フィンゲル神父は、1932（昭和7）年に『神人イエズス・キリスト』と題するキリスト伝を「山形天主堂」より発行した。山形教会に着任してから5年後のことである。『神人イエズス・キリスト』はそれまでに出版した100頁に満たない小冊子とは異なり、630頁に及ぶ立派な装丁本である。このような本を出版するには相当の費用が必要であったに違いないと思われるが、フィンゲル神父がその費用をどうやって工面できたのかは謎である。



『神人イエズス・キリスト』

『カトリック新発田教会宣教135年のあゆみ』には、波多野伝八郎氏が、新発田教会主任司祭フィンゲル神父のもとで、7か月ほど『神人イエズス・キリスト』出版のための日本語の添削・校正の手伝いをしたと書かれている。しかしながら『神人イエズス・キリスト』の初版（1932）も改訂版（1936）もフィンゲル神父の山形教会時代に出版されている。波多野氏は新発田市で教職に就き、6つの小学校の校歌を作詞し、郷土史の研究（新発田市史編集委員長）、執筆など地域に功績を残した人物である。日本の古典や文学にも造詣が深く、新発田教会初代の神父を始め歴代の神父と交流を続け、他の地域の神父たちもわざわざ新発田教会に足を運んで教えを受けていたともあるので、山形教会時代のフィンゲル神父を手伝ったのかもしれない。しかしながら波多野氏は先代の主任司祭に続いてフィンゲル神父にも教理研究の教えを受けながらも生涯受洗することはなかった。実際に出版された『神人イエズス・キリスト』には波多野氏の名前はなく、校訂者として「日高豊一（秋田市）」の名が記されており「本書の述作に当つて、すくなからざる労苦を以て余の原稿の文章を校訂せられた日高豊一氏には、心からの感謝をさげたいと思ひます」との謝辞が記されている。

1936（昭和11）年10月、鶴岡出身の山口良三氏が山形教会伝道師となって勤務し、傍ら神父のキリスト伝改訂増補版の作成を手伝ったとある。山口氏の名前は『天の道「総論」』（3版、1937）のはしがきに謝辞とともに記載されている。

山口伝道師が着任してからは、同世代の熱心な信者たちと一層教会を盛り上げたそうである。『新潟教区宣教小史』には「文筆にすぐれていても、容ぼうも話し方もぶっきらぼうで、あまりおもしろみのないフィンゲル神父が、どうして山形の青年布教に成功できたのか、と不思議に思われるが、たとい表現は下手であっても、神父の誠実な愛が、青年たちの心に伝わったのであろう」と書かれている。やがて軍部が台頭し、国民は沈黙を強いられ、日本は世界からの孤立を深めて教会は困難な時代を迎えることになるが、フィンゲル神父は黙々と読書と著述に励む一方で、若者への布教への熱意は変わらなかったそうである。

（3）『山形天主公教会史：最上氏時代以後の切支丹』

山形教会における出版活動で特筆すべきことは、『山形天主公教会史』を執筆した信徒、美濃部道義氏へのフィンゲル神父による教示と援助であろう。1935（昭和10）年に「山形天主公教会」より出版された『山形天主公教会

史』は、江戸時代の山形地方におけるキリシタン迫害の実態を地域に残されていた資料『切支丹類族帳』に基づいて明らかにしたものである。寛永から正保時代になると幕府のキリシタン改めは「残虐な拷問、火あぶりなどの厳刑」から「入牢させ棄教を迫る」政策に方針転換したため、この時代の殉教者の姿や実態がつかみにくくなったと言われている。見せしめのために十字架にかけられるようなこともなくなり、牢内で死守するしか自らの信仰を証しする方法がなくなってしまったため、この時代の信徒への迫害は一般に知られることはなかったが、『正保年間切支丹入牢一覧表』を付し、史実として明白にしたのはこの本が初めてだと言われている。美濃部氏は、このような殉教者の盤石な信仰は世界史上の驚嘆であり英霊に深い尊敬を捧げたいと記している。

著者の美濃部氏と、生前に『切支丹類族帳』などの資料を収集・筆写した山崎整次郎氏はともに山形教会の信徒である。美濃部氏は山形県師範学校歴史科の教員で、この本を出版する前年の1934(昭和9)年にフィンゲル神父から洗礼を受けている。山崎氏は1880(明治13)年頃に受洗した山形教会の古い信者で、山形第二小学校の校長をしていたそうである。

『山形天主公会史』には、「この冊子を作るに当り、山形天主公会司祭フィンゲル先生は左の史籍につき資料を調査して編者のために懇篤なる教示と援助とを與へられました」と記されている。執筆活動に励む主任司祭の姿を見て、信徒らも触発されたのであろうか。なによりも著者を信徒「美濃部道義」、発行者を主任司祭「フ・フィンゲル」として、1冊の本が出版されたことは素晴らしいことではないだろうか。ちなみにフィンゲル神父が調査した資料として書名を挙げているのは、レオン・パジェス著『Histoire de la religion chretienne au Japon(日本切支丹宗門史)』、エドモン・パピノ(神父)著『Dictionnaire d'histoire et de geographie au Japon(日本歴史地理辞典)』、ステシエン(神父)著『The Christian Daimyos(切支丹大名記)』で、いずれも今ではよく知られた資料である。フィンゲル神父は、自らの著書『天の道「総論」』(3版, 1937)の最後で、「他地方の読者諸賢は、其の題目のみを見て、単なる地方的事丈けと誤解なるかも知れませんか、之を広告の頁に並んで居る、他の六小冊子と正式に添へずしても、布教史に専門的興味のあられる希望者には、注文に従って何時でも差し上げます(定価拾五銭)」と信徒の著作『山形天主公会史』の宣伝までしているのである。

(4) 山形を愛したフィンゲル神父

フィンゲル神父は山形を深く愛し、1935(昭和10)年秋には畑地を購入して信徒のための墓地とし、自分も死んだら山形に葬られたい、などと口にしていたそうである。『だうねす』創刊号(1982.9)の「カトリック山形教会墓地」の記事によれば、墓地敷地購入のために、信徒の有志らが山形商業銀行に月額10銭ずつを積み立て、1924(大正13)年までの7年間に利息とあわせて75円87銭4厘を集めたそうである。最終的には、墓地敷地購入のための諸経費の57%はフィンゲル神父が執筆活動で得た奨金によるもので、質素な生活と著書印税で貯めた寄附金であったことが記録に残されている。『カトリック山形教会100年史』には「聖堂と墓碑、司祭館の建設、さらに盛んな出版、若者の文化活動などフィンゲル神父時代の十二年間に山形教会は自らの骨格を築いた」とある。「積極的」とか“激しく”という言葉は表面上だが縁遠い人だった」が、山形教会在任中に150人を超える受洗者があったという。

フィンゲル神父は1938(昭和13)年11月、突然に新潟の新発田教会へ転任になり、愛する山形から離れることになった。1942(昭和17)年5月31日、三位一体の祝日のミサに来ないフィンゲル神父を迎えに行った二人の信徒が、部屋でひとり亡くなっている神父を発見した。その時にも部屋の鍵はかけられていたそうである。

3. プリカ神父：岐阜教会での母と子のための出版活動

(1) プリカ神父と岐阜教会

ブルーノ・プリカ神父(PRYKA, Bruno SVD, 1897-1946)はドイツ、ミュンスター教区ハンフォルンファルンに生まれ、1924(大正13)年司祭に叙階・来日し、金沢教会に赴任した。1926(大正15)年7月に29歳で初代岐阜教会の主任司祭に就任し、1942(昭和17)年3月に中国・青島に渡るまでの16年間で岐阜で活動することになる。プリカ神父は、はじめ現在の岐阜市徹明町近くの宿屋を借りて宣教を行ったが、その後、長住町三丁目の借家を仮教会とした。1928(昭和3)年8月、青柳町に500坪の土地を購入し、翌1929(昭和4)年2月にヒンデル氏の設計によるバジリカ式聖堂の教会を建立した。ヒンデル氏は第1章で前述した新潟教会の設計者でもある。『鶴岡カトリック教会歴代司祭のアルバム』には、「聖霊」と名付けられた教会堂は「プリカ師が文芸美術にすぐれた才能のある方だけにその

好みによって建てられた本建築の聖堂」で、「高い鐘楼があり、ドイツから贈られた鐘が鳴り渡り、著名な画家の手になる祭壇壁画は訪れる人々の目を見張らせた」と記されている。

カトリック文庫に所蔵する『彌撒(みさ)聖式』(1936)は、はしがきに「御ミサ典礼を具体的に説明する一方法として岐阜教会の美麗なる聖堂に於いて御ミサ中に行われる主なる聖式を写真に収めたのである。本書の挿絵は即ち其れである」とあり、モノクロではあるが、岐阜教会の祭壇の壁一面に描かれた大胆で美しい宗教画の様子を今に知ることができる。1930(昭和5)年5月には教会敷地内に聖霊奉侍布教修道女会によって幼稚園も開設された。この幼稚園は戦時中に一時閉鎖されたものの、その後復園し、天使幼稚園として今も存続している。

(2) 岐阜のキリスト教系幼稚園

プリカ神父が活動した岐阜は保守王国と言われ、宗教的には、飛騨、西濃を中心とする仏教(特に浄土真宗)の地盤であり、東濃地方は平田学の復古神道を主唱する神社神道の地盤であった。このような人的交流の乏しい土着の風土、思想を持つ地域では、単なる宗教的情熱だけでは布教は行き詰ってしまう。そのため広い視野をもった外国人宣教師たちは、幼児期よりのキリスト教教育ということに着想した。1915(大正4)年にヒルダ・ロビンソン女史によって始められた岐阜聖パウロ教会附属の岐阜明道幼稚園、1919(大正8)年S・L・ワイドナー女史による大垣キリスト教幼稚園、1921(大正10)年の美園幼稚園、1924(大正13)年日本メソヂスト華陽教会附属の芽含幼稚園など、大正から昭和にかけ、岐阜県内でキリスト教系の幼稚園設立が進み、プリカ神父が主任司祭を務める岐阜教会においても1930(昭和5)年に幼稚園が開設されている。『岐阜キリスト教史』によると、「大正十三年(1924)、聖公会の記録(『教区のあゆみ』)によりますと、『教勢優勢、(中略)求道者特に婦人求道者が多い』」とある。また、1935(昭和10)年に岐阜県教育会が発行した『岐阜県大地理』には、幼稚園について、「私立は寺院・教会・婦人団体等が設立してゐるもので、概ね成績良好である」とある。幼稚園を拠点とした幼児や母親への布教活動が順調であったことを推測させる。

雑誌『聲』No.666(1931.7)には、同年5月12日に催された「岐阜天使幼稚園の母の日」についての記事が掲載されており、そこには、「園児の母親を中心として、志ある母親の為に母の日を催しました」「プリカ神父は御講演に於て、(中略)教育の四大条件 一、教へ始める時期 二、父母は子供の模範たる事 三、それが為には言行一致たるべき事 四、賞罰 をつぶさに懇切に母親の重任として力説されました。ついで聖霊奉仕修院の童貞方と共に幼児教育と相まつて、母親の教育の実際の方法について種々議する所がありました」と書かれている。プリカ神父が、幼稚園における幼児と母親への教育に力を入れていた様子がうかがえる。

その後、戦争は次第に激しくなり、敷地内の幼稚園は1941(昭和16)年に閉鎖、1945(昭和20)年7月9日の空襲で岐阜教会と幼稚園舎は焼失した。

(3) 岐阜での母と子のための出版活動

プリカ神父は、1934(昭和9)年に「岐阜天主公教会」よりエリザベス・フォン・シュミット＝パウリ(SCHMIDT-PAULI, Elisabeth von, 1882-1956)作; プリカ訳『勇者タルチジウス』を発行した。この本は、少年のための聖人物語の単行本を数々発行したヘルデル社から1930年に出版された『Geschichte des hl. Tarcisius : und was den ersten Christen geschah』の翻訳で、「御聖体を守護して潔く死んで行つたキリストの勇者タルチジウス」の殉教物語である。プリカ神父は序言の中で、「タルチジウスは少年らしい少年でした。いはゆる男児の長所と短所とを備へた本当の少年だったのです。偉い人、先祖にあった様な勇者になりたいのでした。そして真理を認めたとき、本当



『リタの手紙』

の神様の勇者になりました。丁度この点に於いてタルチジウスは日本の少年のためには適当なお手本であります」と記している。『勇者タルチジウス』は、雑誌『聲』のNo.679(1932.8)～No.689(1933.6)(No.685は未掲載)に10回にわたって掲載されたものを単行書としてまとめたものである。

『リタの手紙』全5巻は、彼の代表的な翻訳であると言われている。1935(昭和10)年から1937(昭和12)年にかけて敬虔なカトリック信者であるドイツの女流作家エンリカ・フォン・ハンデル＝マツェッティ(HANDEL-MAZZETTI, Enrica Ludovica Maria Freiin von, 1871-1955)の小説『リタの手紙(Ritas Briefe)』

全5巻を邦訳し「(岐阜)天主教教会」で発行された。『リタの手紙』は、1巻「可弱き少女のかどで」、2巻「あかつきの決闘」、3巻「暴風雨の前の静けさ」、4巻「暴風雨になやむ白百合」、5巻「殉教者なるキリストの花嫁」と各巻にもタイトルが付されている。『聲』No.745(1938.2)「書物展望」には、「洗練された公教用語は印刷校正に当たった眞愛社主人にして初めて見られる所である」と書かれている。『リタの手紙』は東京の眞愛社が印刷所となっており、この印刷所の主人が校正も行っていたということだろうか。先に書かれた『兄と妹』の続編として執筆されたこの小説は、「修道志願のリタが秘密結社員の父とヒステリーで素行の悪い母と執拗な求婚者との間にあつて苦しみ貞潔の危機を免れて貫き童貞殉教者として永眠し父も改心する」といった荒筋であり、「リタの信仰深き涙の生活を、この拙い訳文によつて、其の万分の一でも皆様にお伝へすることが出来ますなら、訳者の非常な喜とする所であります」と訳者序に記されている。また、『リタの手紙』の美しい表紙や、毎号異なる説明付人名葉には、プリカ神父の「文芸美術にすぐれた才能」が表れている。

『リタの手紙』3巻が出版された1937(昭和12)年に、発行所名が「(岐阜)天主教教会」から「母と子の友社」に変わっている。同じ時期に同教会から発行されていた、家庭教育を扱った雑誌『母と子』の誌名にあわせて変えたのでないかと思われる。これ以降、プリカ神父は一貫して母と子の友社(「母と子之友社」の表記もあり)から自身の関連書籍を出版している。

『母と子』は毎2ヶ月1回発行、毎号12頁、写真入の家庭教育雑誌で、『神言修道会来日百周年記念誌』によると、その出版部数は1937・8(昭和12・13)年の段階で2,700部に達したと言われている。『リタの手紙』には「この雑誌は、理論的な知識ではなく、具体的な面白い喩話をもつて、最も有効に家庭教育のあらゆる方面に互つて研究する事を目的として編集してゐるもので、従つてこれを愛読して下さる方はきつと、子供の教育は、どうしなければならないか、又どうしてはいけないかと云ふ様な事を、色々な方面から御覧になる事が出来ると思ひます。是非御一読御覧下さい!」といった広告が掲載されている。まさに「母として、主婦として、生活の設計師である家庭の婦人への良き指導者」のような雑誌であった。「こんな雑誌は他に見た事がないと言つて、どんどん読まれてゆき」、一年分を合本した「六十二頁、石版五度刷の美しい挿絵が二枚入った製本」も作られた。雑誌も合本版も長らく実物(現存)を見つけることはできなかったが、当原稿の校正段階に至つて、最初の1年分を除く6年分の合本版が某所より偶然に見つかったことから、ここにプリカ神父の手がけた美しい表紙の写真を掲載する。雑誌『Actio missionaria』(1937.10)の「APPENDIX(付録)」には「KODOMO NO MOHOSHIN(子供の模倣心)」というローマ字の記事があり、そこには「B. PRYKA S.V.D.」の名前と「“Haha to Ko” dai 17 go yori」との記載とともに「Kodomo wo yoku kyo-iku shitai to omou nara, mazu futaoya no kyo-ikuteki soyo ga kanshin desu.(子供を良く教育したいと思ふなら、先づ両親の教育的素養が肝心です。)」の文章が引用されている。この記事からもプリカ神父が、雑誌のテーマどおり、母と子の教育に熱心であったことがうかがえる。



『母と子』合本版の表紙

1938(昭和13)年には『ガルシア・モレノ：眞理の顯揚者、殉國のエクアドル大統領』を出版。1915(大正4)年に教学研鑽和仏協会から発行・絶版になっていたものを母と子の友社編集部で改訂・発行した。改訂版の序には、「今度神言会長ガブリエル師の発意によつて、母と子之友社編集部にて改補し発行することにした」とあり、第2章で前述されたガブリエル神父の発意によるものであることがわかる。「ガルシア・モレノはカトリック者として(中略)遂に思想戦線に討死するに至つたキリストの騎士である。(中略)此の秋我等はモレノをもつて理想とし、モレノからその勇氣と戦法とを学ぶことにしよう!」とプリカ神父の力強い言葉が載せられている。

1940(昭和15)年にリヒャルト・グレイフ(P.Richard Graf)著；プリカ訳『然り父よ：日主に於て(Ja, Vater!)』を母と子の友社より出版。カトリック文庫が所蔵する『然り父よ』には、恐らく新聞の切り抜きかと思われる書評が貼り付けられており、神言会の牧野房男神父が「満ち溢れた近代人の鋭敏な感覚と其のデリカシイを通して掘り下げられたカトリック教義の深さ」「修道の根底となり、その基幹となるものは、天主の御旨を己が日常生活に実現することに他ならぬ」と読後の感想が述べられている。他の出版物が一貫して母と子のための本や雑誌であることを思うと、この本の題材は趣を異にしているのではないだろうか。

この本は初版から12年後の1952(昭和27)年、プリカ神父の逝去後にエンデルレ書店より第2版が出版されている。第2版の序で「神言会司祭故ブルノ・プリカ師訳による本書の日本語版は、主として修道者間に愛読され、その

価値は、一部では大変高く評価されて居たのであるが、ドイツにおける如く一般の注目をひくに至らずして、昭和二十一年十二月プリカ師帰天後は絶版同様になって居た。近來カトリック関係の出版物の数は極めてふえ、修徳書も、人々はみずから好む所に従っていろいろな種類の本を比較的容易に得られるようになったが、本書の再版を強く希望される向きも方々にあるので、本会では故プリカ師の偉業を続ける事に決し、原著者の承認を求めた所、快諾を得たので、ここに再びその形を改めて世に見える事になったのである」とあり、神言会が原著を尊重しながら、内容全般を日本人が理解しやすいように書き改め、かつ旧版の誤植を訂正したことが記されている。

『然り父よ』が出版された1940(昭和15)年には『懐胎中の婦人の祈り』も母と子の友社より出版されている。「日々の生活に於いて我を守り給へ。かくて我が胎児は霊肉共にいさゝかも害を蒙らざらんが為なればなり。アーメン」といった妊婦の祈りが18ページにわたって綴られており、幼きイエスを抱く聖母マリアの表紙絵の美しい本であるが、本学には所蔵がない。

『子供の樂園』は、雑誌『母と子』に5年間掲載された「マヤー家の家庭の喜と心配(Die Maiers : Familiensorgen und Freuden)」の翻訳を改作した作品である。リスベット・ブルゲル(BURGER, Lisbeth)の原著は「私達にドイツの理想的な家庭を紹介したもので、或る父母が力を協(あわ)せ、あらゆる方法をもって、其の子女を有能な社会の一員に教育すべく努力するといふのであります」と緒言に紹介されているが、翻訳の改作版である『子供の樂園』は日本の家庭が舞台になっており、マヤー家ではなく、高橋家として紹介されている。原著と照らし合わせると、ドイツの家庭が日本の家庭としてどのように描かれているかを読み比べることができ、きっと興味深いことだろう。プリカ神父は、「子女教育の尊い使命を有する、全日本のお母様達に此の一書を捧げようとするのであります」と記している。『子供の樂園』は、1942(昭和17)年8月にドン・ボスコ社より発行されている。プリカ神父はこの年の3月に日本を離れているので、母と子の友社の活動もプリカ神父の離日に伴って終了したものと思われる。ドン・ボスコ社はカトリック系出版社で、サレジオ会来日後2年を経た1930(昭和5)年、同会のアンジェロ・マルジャリア(MARGIALIA, Angelo, 1898-?)神父の尽力によって大分市に設立され、その後東京に移転した。戦前には、口語体『合併福音書』『カトリック講和集』を企画出版、戦後まもなくには月刊雑誌『からしだね』を発刊し、1952(昭和27)年以後『カトリック生活』と改題して続いたが、2024年3月号をもって休刊となっている。

プリカ神父が岐阜で出版した本は主として子供たち、ひいては子供たちを育てている母親たちの教育のためのものであった。これは、「保守王国」と言われる岐阜という土地において、幼児期よりのキリスト教教育の必要性を強く認識していたためかもしれないし、併設された幼稚園に毎日通ってくる子供たちやその母親たちに届けたいという理由からかもしれない。あるいは、プリカ神父自身が秘めていた生涯のテーマだったのかもしれない。キリスト教に根ざしながらも、子供たちにわかりやすいヒーローやヒロインが登場するような原著を選び、翻訳している。また家庭雑誌『母と子』を出版し、発行所を「母と子の友社」に改めたことは、まさにプリカ神父が「母と子」の教育に力を入れ、寄り添ってきた姿勢のあらわれではないだろうか。

しかし、戦争が長引き始めた1940(昭和15)年頃には国内の出版物統制が強化され、美術への造詣が深く、これまで美しい本を作ってきたプリカ神父の出版物も、表紙にはタイトルが載るだけの簡素なものとなってしまった。また『母と子』をはじめとする定期刊行物も、用紙の配給が得られなくなり発行停止となったのである。

(4) 晩年のプリカ神父

プリカ神父は1942(昭和17)年3月に日本を離れて中国・青島に渡り、約2年間、青島の日本人信者のために働いた。1944(昭和19)年に日本に戻り、12月10日に第9代鶴岡教会主任司祭となったが、戦争末期のこの時期は教会を訪れる人も少なく、黙想と祈りに耽る毎日であったという。岐阜を離れて以降のプリカ神父の著作物は見つからない。

『鶴岡カトリック教会歴代司祭のアルバム』には、鶴岡には東京から3,000人とも言われる集団疎開の子供たちが来ており、「新聞などで彼らのことを知ったプリカ神父は不可能と知りながらも、ぜひ教会に招いてみたいと心中思われていたに違いない」とあり、戦時中も子供たちのことを案じていた様子がうかがえる。

戦争が終わった1946(昭和21)年10月には米沢教会のガブリエル神父から鶴岡教会に聖堂の鐘が贈られ、鶴岡市民に平和の到来を告げた。今こそ神の道を説くチャンスと笑顔で人々を迎えたプリカ神父であったが、その年の12月に胆石で倒れ、看取る人もなく一人天に召されてしまった。享年49歳の若さであった。終戦後の食糧難と薬不足、医師不足の中で病死され、お通夜には伝道師一人しか居合わせなかったという。プリカ神父が尽力した美しい岐阜教会の聖堂が、終戦のわずか1か月前に空襲で焼失してしまったこともご存知であったに違いないが、平和を見届けて亡くなったことが唯一の救いである。プリカ神父は鶴岡の教会墓地に眠る唯一人の外国人司祭とのことである。

4. 六人の神父、それぞれの歩みと出版

(0) 神父と日本語

一口に日本における出版活動とはいいながら、神言会員の神父たちはどのように日本語を学び、どのようにして身につけていったのだろうか。素朴な疑問である。

少しばかり紹介すれば、1930(昭和5)年に多治見修道院が設立されて以来、来日した会員の大半はそこで数か月間滞在して日本語の教育を受けるようになり、あとは宣教司牧活動をしながら独学で学ぶのが慣わしで、1945(昭和20)年の終戦後も同様だったという。しかし、南山学園を設立し教員として働くようになると、それではさすがに不十分とのことで、1953(昭和28)年の春、東京・港区六本木のフランシスコ会聖ヨゼフ修道院に宣教者のための日本語学校が開設された。神父たちは東京・吉祥寺教会の前身となる「アルベルト・ホーム」(修道院兼研究所)や港区・麻布修道院、渋谷区・広尾修道院などに住み、その日本語学校に通ったのだった。東京での神父同士の出会いと交流や日本語習得が、その後の神言会員の執筆・出版活動に少なからぬ影響を与えたことは容易に想像できる。逆に言えば、それ以前の執筆には神父たち個人に負うところが大きく、あらためてその努力と力量には驚きを通り越して感動すら覚える。広くは日本における神言会の出版活動を本号のテーマとしながら、個々の神父に焦点を当てている理由のひとつはそこにある。

この章では、最初期のチェスカ神父(第1章)から時代を下り、フィンゲル神父(第2章)やブリカ神父(第3章)と重なる時期もあるが、主に1930年代の出版に係る他の神父を、叙階年順に取り上げる。残されている関連資料の多寡のため、神父ごとの記述分量に差があるのはお許しいただきたい。なお、1940年代以降の特に教養社関連については、『カトリコス』No.35において取り上げているため割愛する。よって、コンスタンティン・グドルフ神父(GUDDORF, Konstantin SVD., 1905-1985)やヤコブ・グ rintゲス神父(GRUINTGES, Jacob SVD., 1900-1980)については、同時期の教養社以外の著作を後段で列記するに留める。また、神父個人ではなく神言会が編集等に携わったものについても書名等を伝えるのみとする。

(1) フーベルト・ライニルケンス神父(前出)

ドイツに生まれ、神学生の傍ら第一次世界大戦で戦った軍人でもあった。1920(大正9)年に司祭に叙階され来日、翌年より鶴岡教会に赴任、熱血漢として知られる主任・ガブリエル神父(前出)(『カトリコス』No.35を参照)の助任となった。日本語修得のための学校も教材も無かったため、小学生用の教科書を用いて学び、信者に教えを乞うたという。1924(大正13)年7月にガブリエル神父が秋田へ転じると、そのあとを受けて主任となった。翌年10月には、それまでの伝道館を改築し「マリア園」という幼稚園を開設した。はじめは園児も20名足らずであったが次第に増え、県や市から補助金を受けるまでになっており、地域から認められたことがうかがえる。1933(昭和8)年1月に中国・青島で日本人の司牧に従事したが、同年7月には再び鶴岡に戻った。1937(昭和12)年11月には、自らの戦争体験を内容とする講演がマリア園で行われ、その要旨と市民100名が集まったとの記事が新聞に掲載されているという。1939(昭和14)年7月には、市内の教師の大半が出席した鶴岡市教育会総会に講師として招かれ、戦争と祈りの必要性について語っている。神父が市民から信頼を得ていた証左であろう。新入者は「他所者(たしよもの)」と蔑まれて1年間は相手にされない、などと言われた保守的で閉鎖的な城下町・鶴岡ではあったが、比較的多くの信者を得て発展している。これは、ガブリエル神父やライニルケンス神父など歴代の神父が、それぞれ十数年ずつ長きにわたって在住し、ゆつくりと親交を深め、教会建築の拡充や美化、典礼行事の荘厳さに努めたところが大きかったと考えられている。

他のエピソードとして、1941(昭和16)年には新潟教会に転じたようだが、翌年3月以降、新津の信徒宅に通い、ミサを捧げたとのこと、これが戦後の新津教会につながっていくことになる。また、第二次世界大戦末期の1945(昭和20)年4月には、新潟教会のほとんどが陸軍軍医学校に接収されたが、戦後に返還されると、同年10月にあらためて新潟教会に主任として着任し、布教活動に邁進している。享年83歳。

さて、ライニルケンス神父の著作・翻訳には、1940年代から50年代、60年代前半までのものが多数であり、第1章で取り上げた『少年聖書』も1950年代の作品になっている。1930年代のものとしては『聖教の本』および『聖書讀本(舊約聖書の部)』のみとなるが、後者に関連して『聖書讀本(新約聖書の部)』も記載しておく。『聖教の本』は、子供用の宗教教育に適した教材が少なかったため、1930(昭和5)年7月から1932(昭和7)年まで催した聖画展で収集した聖画をもとにまとめられたらしい。

なお、『聖教の本』は出版者に「新潟カトリック教會」とあるが、神父は出版当時鶴岡教會所属であり食い違う。新潟教区で許可されたものがそのまま新潟教会から出版されたのかもしれないが、真相は不明である。好評につき同内容のものが複数の版元から出版されたとの未確認情報もある。『聖書讀本(舊約聖書の部)』も初版の年は鶴岡在籍と思われ、前者の頃はまだ完全には地域に溶け込めていない時期かもしれないが、逆に後者はすでに多くの市民から評価されていた時期ではないだろうか。そんなことを頭の片隅に置きながら読んでみるのも一興かもしれない。

- ・『聖教の本』([ウイルヘルム・ビヒラー著]; ライニルケンス譯)(新潟カトリック教會, 1933)
- ・『聖書讀本(舊約聖書の部)』(ライニルケンス著)(東京: 歐亞書房)(1939)
- ・『聖書讀本(新約聖書の部)』(ライニルケンス著)(東京: 歐亞書房)(1946)

(2) エミール・ナーベルフェルト神父(NABERFELD, Emile SVD., 1897-1979)

ドイツで生を受けた神父は、1926(大正15)年5月に司祭に叙階され、同年9月、一緒に叙階された二人の“同級生”とともに来日している。この二人のうちの一人が先に触れたグリントゲス神父である。まずは金沢で日本語を学び、翌年新潟で布教を開始した。1931(昭和6)年に秋田教会に移るが、同年再び新潟に戻り借家にて宣教することとなった。これが新発田教会の始まりである。その後の委細は不明だが、1937(昭和12)年には前述の「アルベルト・ホーム」で寝起きしていたとの記述もある。続いて翌年11月からは再び新潟教会に移り(後任は第2章で触れたフィンゲル神父)、1940(昭和15)年からは主任司祭を務めた。

新潟では、浴衣を着て銭湯に通い、近隣の知識人や僧侶などとも気安く交流し、衣食に困った人たちには惜しみなく自分のものを提供したという。それゆえ、子供好きで庶民から慕われた越後国(現新潟県)出身の江戸後期の僧侶になぞらえ、「良寛さん」と呼ばれ親しまれた。チェスカ神父と並んだ写真ではだいぶ小柄に見えるが、別の写真ではいかにも柔和そうな笑顔をされており、優しい人柄と存在感で皆から愛されたであろうことがよくわかる。

この頃からナーベルフェルト神父は、布教活動にあたり、日本人の精神的・文化的背景の理解が必要だと感じていた。それがわからなければ、神の言葉の真意を理解してもらい、信徒の増加に結びつくような宣教ができないと考えたからである。そのため、日本の歴史の勉強を始め、数年後の第二次世界大戦直前には『Grundriss der japanischen Geschichte』(直訳すれば『日本史概略』)を出版した。これは、外国人宣教師に日本民族の特徴を理解してもらうことを目的とするものであったが、後にドイツの大学でも教科書として使われることとなり、1965年には改訂版が出されている。

また、先の「アルベルト・ホーム」では、宣教司牧の傍ら、日本人の精神的背景のさらなる理解のため、仏教の研究に勤しんだ。後には他の高校・大学教員に協力して『維摩詰所説経』をドイツ語に翻訳し、出版している。この経典が初期大乘仏教において重要視され、仏教の思想を理解するためには極めて有益なものと言われているからだと思われる。以来、病気になるまで仏教に深い関心を寄せ続けており、戦後には駒澤大学の教員から仏教を学んでいる。くだんの教員宅にたびたび同行したアントン・レンメルヒルト神父(LÄMMERHIRT, Anton SVD., 1911-1980)が、なぜそんなに仏教に深い関心があるのかと尋ねたのに対し、「仏教の根本思想のひとつは諸行無常です。この世ははかないものであるということを強調するものです。我々キリスト信者は、仏教徒よりも、この世のはかなさを強調し、そして、それに従ってこの世とこの世にあるものを、軽んずべきではないでしょうか」と答えたという。同時に「神父様にとって、諸行無常と、この世のはかなさに対する知識は、ただ学問的、抽象的な真理ではなく、日々の生活にいかすべき、そしてキリスト教によく合う真理でした」とも述懐している。そのため、神父の生活は「非常に質素」で「衣食住にはほとんど無頓着」であり、それは「この世のものには執着してはいけないという神父様の根本思想から出た態度」だとしている。無限の神からすれば現世のすべてが無に近いものであり、よって現世のすべてに固執してはいけない、というナーベルフェルト神父の信条が、他者だけでなく自分自身と自分の仕事に対してさえ謙虚にし、「本当に肝心なことは、ただ神と神の御栄光のために働くことだけ」と考えさせたのだと、レンメルヒルト神父は捉えていたようである。

その後、1942(昭和17)年に新潟教会から「アルベルト・ホーム」(この時点では高円寺教会の分教会の位置づけ)に移り、一時期埼玉・川口へ疎開していたものの戦後に戻り、聖歌隊を指導するなどした。そして1947(昭和22)年には、前任のフーベルト・フラッテン神父(FLATTEN, Hubert SVD., 1899-1983)から主任司祭を託された。この頃の盛況ぶりを、信徒は次々と増え、日曜日ごとの2回のミサはいつも満員で、致し方なく隣の幼稚園を借用した、と伝えられている。それでも月1回の「解説ミサ」では、司祭の着衣を祭壇の前で見せたり、聖式の内容を丁寧に説明

したりするなど、典礼に意を配られていたという。1949(昭和24)年2月には高円寺教会から独立し、正式に小教区として認可されたが、仮聖堂でクリスマスの初ミサが行われる際には、真夜中の聖歌に驚かれないようにと近隣住民を気遣い、挨拶回りをしたとのことである。こうしたキリスト教が根付いていない日本への配慮もあってか、吉祥寺教会においても「武蔵野の良寛さん」との愛称で親しまれ、多くの青年が司祭への道を志すことにもつながった。その人気のほどは、神父と話をしたいがために同じ時間帯に何人もが来訪し、それぞれが4つの部屋で待っているところを、神父はぐるぐる巡回して対応したとのエピソードからもうかがえる。

また、ナーベルフェルト神父は、長く司祭を務めた新潟や吉祥寺以外にもいくつかの教会の設立に携わっている。たとえば、1957(昭和32)年3月より南山教会に着任すると同時に日本準管区名古屋地区長になった際には、名古屋市西部に教会をつくるよう当時の名古屋知牧区長から要請され、これが後の五反城教会(当時は岩塚教会)である。あるいは、1962(昭和37)年4月に名古屋使徒座知牧区が司教区に昇格した際には、遠方から来る信徒のため、できるだけ南山教会から離れたところに建設を、という司教からの要請を受け、計画時から係り初代主任司祭となったのが膳棚教会である。

1970(昭和45)年には再び南山教会へ移り、その後は大館教会に在籍した時期もあったが、高齢のため体力的に限界となり、最後は1975(昭和50)年から多治見修道院で余生を送った。享年82歳。

- ・Grundriss der japanischen Geschichte : zum Memorieren, Orientieren und Repetieren / P. Emil Naberfeld. – Deutsche Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens, 1940. – (Mitteilungen der Deutschen Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens ; Supplementband 19)
- ・Das Sūtra Vimalakīrti (das Sūtra über die Erlösung) / Vimalakīrti-nirdeśa ; nach einem nipponischen Manuskript von Kawase Kozyun ; übersetzt von Jakob Fischer und Yokota Takezo. – Hokuseido, 1944. (Title also in Japanese: 維摩詰所説経)

(3) ハインリッヒ・プンスマン神父(PUNSMANN, Heinrich SVD., 1901-1995)

ドイツに生まれ、1930(昭和5)年に叙階され、同年に来日したのち、多治見修道院で日本語を修得、翌年には新潟教会の助任となった。その後、前述のライニルケンス神父が青島滞在中の1933年(昭和8)年1月からの約半年間、鶴岡教会に派遣されたが、7月に新潟に帰任し、続く同年12月には米沢教会主任として着任した。米沢では寛永5年12月18日(西暦1629年1月12日)にすでに50名を超える殉教者を出しており、明治維新後も長い間再宣教は行われなかった。1929(昭和4)年12月、ようやく借家をカトリック教会とするまでになったが、若くして当時の司祭が亡くなり、その後任として任命されたのがプンスマン神父であった。着任の翌年7月には現在の教会の土地を購入し、さらに翌年には教会を完成(1935年12月3日献堂式)させている。これで米沢教会の基盤は整ったが、この頃から世界情勢は次第に険しくなり、宣教は困難となった。

鶴岡時代の半年間は、子供のための公教要理に力を注ぐ一方、黙想に関する著述を続けたとの記録もあるが、これら以外にプンスマン神父関連の記述が見当たらず足取りがつかめない。その他の情報としては、1940(昭和15)年2月には多治見修道院の修練長として転任するも、種々の理由により結局修練士を迎えることなく、同年11月に(亡くなった戸塚文卿神父の後任として)東京桜町病院のヨゼフ会指導司祭となり、長く同職を務めたという程度である。1981(昭和56)年の時点でプンスマン神父を「在ドイツ」としている記述もあるから、後年ドイツに住まいを移されたのであろうか。享年93歳。

さて、神父が編者として携わった『彌撒聖式』を第3章で紹介したが、これ以上の情報はない。刊行時期からして、米沢教会に新しい聖堂が完成し、そこで執り行われるミサを念頭に編集されたのであろうか。

- ・『彌撒聖式』(プンスマン [編]) (東京:聖ヨハネ會, 1936)

(4) ヘンリー・ファン・シュトラレン神父(VAN STRAELEN, Henry SVD., 1903-2004)

オランダに生まれた神父は、1932(昭和7)年に叙階され、フラッテン神父が1937(昭和12)年10月に院長として着任した前述の「アルベルト・ホーム」(後の吉祥寺教会、1949年2月に高円寺教会より独立)で寝起きし、先に紹介したナーベルフェルト神父らと同様、神道、仏教、考古学などそれぞれが専攻する日本文化を研究しながら宣教司牧にあっていた。この頃には神言会日本管区本部である多治見修道院との神父たちの行き来が頻繁になり、教会の勢力発展の道すがらであったが、第二次世界大戦の勃発により苦難な時代へ向かうこととなった。神父たちとしてはむしろ協調的に振舞ったようだが、その態度がかえって誤解されたり、官憲からの監視等による精神的な苦痛に

あわせて、物資や食糧の不足に悩まされたりし、特に食料の確保には日本人と同等かそれ以上に苦勞したようである。いよいよ空襲の激しさが増してきた1945年春には、外国人司祭は強制疎開となった。享年100歳。

ファン・シュトラレーン神父についてもこの程度しか情報がないが、本稿で何度も触れている「アルベルト・ホーム」は、多くの神父たちの交流が生まれ、その後の神父たちの出版を含む活動や人生そのものにも少なからず影響を与えた場所のようである。しかも、後継の吉祥寺教会は、カトリック東京大司教区のなかで神言会が管轄する唯一の小教区であるため、東京における神言会の宣教活動の前史的なところを若干紹介しておく。

カトリック教会は、1844(天保15)年頃から日本への宣教を試みており、宣教師たちは1858(安政5)年頃から活動を開始している。しかし、江戸(東京)が幕府のお膝元であることからなかなか接近できず、宣教師が初めて東京に入ったのは1859(安政6)年のことであった。その後、江戸幕府から明治政府への移行に伴う混乱はあったが、1874(明治7)年の築地教会の建設を皮切りに、10年間のうちに神田、浅草、八王子、本所、麻布など7か所に教会が設立され、徐々に増えていった。1907(明治40)年に神言会が来日する前には、すでにパリ外国宣教会などいくつかの修道会が来日し、その後も次第に増えており、東京で宣教などの活動を展開している。そして神言会は1935(昭和10)年、高田教会の出張所との位置づけで西荻窪に民家を借り、東京での宣教活動を開始した。翌年、信徒の所有地に建てられた修道院兼研究所がくだんの「アルベルト・ホーム」である。

さて、ファン・シュトラレーン神父の著書『光を浴びて：黙想指導書』『The Japanese woman looking forward』は、この「アルベルト・ホーム」での研究、経験に基づくものと思われる。

・『光を浴びて：黙想指導書』(ファン・シュトラレーン著)(ドン・ボスコ社、1938)

・『The Japanese woman looking forward』(by H.V. Straelen)(Tokyo : Kyo Bun Kwan, 1940)

(5) フランツ・サウエルボーン神父(SAUERBORN, Franz SVD., 1904-1989)

ドイツに生まれ、1932(昭和7)年に司祭に叙階、1934(昭和9)年に来日した。その後の詳細は不明だが、1938(昭和13)年11月に毛馬内から高田教会主任に着任し、以来1945(昭和20)年まで在籍していたことは記録に残っている。

この高田教会時代は、神父にとってはもちろんのこと、信徒ほか関係者にとっても非常に苦難の時代であった。着任の頃は、日独文化協会を立ち上げるなどして、多くの知識人との交わりがあったが、来日前にイギリスに留学していたこと、アメリカの知人と文通していたことなどから次第に軍部に目を付けられるようになった。特別高等警察や憲兵からスパイ容疑で監視されるだけでなく、家宅搜索のようなことをされたそうである。そしてついに1944(昭和19)年4月から5月にかけて、キリストの再臨に係る説明を理由として数名の信徒とともに逮捕されるに至った。黙示録の記事解釈についての取り調べ中に述べた信仰告白と主張が、当時の天皇を現人神とする国民感情に逆らう危険な思想と判断されたとのことである。中島邦氏(聖母カテキスタ会員[現・聖マリア在俗会]、1960年代に南山学園で「宗教」担当の教員)は、このときのことを「信仰と現実の厳しさを考えせられた」と回想している。結局、神父と3人の信徒は新潟刑務所に移送され、そこで終戦まで1年4か月間の拘留のうえ、治安維持法違反で皆が執行猶予付きながら実刑判決を受けた。このため健康を害したサウエルボーン神父は、戦後名古屋に移り、さらに数年後に2年ほどアメリカで静養している。しかし、高田教会在任中は特別高等警察の監視を受けながらも熱心に教理を学ぶ人があり、入信者は40名余に及ぶこととなった。また、一緒に拘束された信徒は、戦後の教会活動の中心的な役割を果たしたそうである。これらのことは神父にとってせめてもの慰めではないだろうか。

サウエルボーン神父はまた、1948(昭和23)年、名古屋市昭和区雪見町の聖クリストファーズ(南山教会の出張所的施設)で視覚障がい者のための社会活動を始め、1950(昭和25)年5月に南山大学講堂でフィラデルフィア・クラブの発会式を行っている。この会は、視覚に障がいを抱える者とそうでない者とは協力し、点字奉仕、種々の援助活動への支援、講演会、巡礼、遠足などを行い、視覚障がい者に物心両面での生きがいを提供する目的で設立された団体であった。



神言会のふたりの聖人

アメリカから帰国したのは、5年間(1948年～1953年)、南山学園で英語の教員として勤務している。そして、1956(昭和31)年には神言会を退会してドイツに帰国し、教区司祭となった。1989(平成元)年没、享年84歳。

さて、『人間の發展』は1940年刊行であるから、まさに苦難の真っ最中であった。信仰と日本の精神との調和に苦慮していた時期の神父の著作であることに思いを馳せつつ読めば、また違った味わいを噛みしめられるかと思われる。

・『人間の發展』(サウエルボン著)(ドン・ボスコ社、1940)

(6) アウグスティン・シュタウブ神父(STAUB, Augustin SVD., 1908-1993)

ドイツに生まれたシュタウブ神父は、1936(昭和11)年に叙階され、翌年来日している。その後、1940(昭和15)年前後には大曾根(旧下飯田)教会で助任を務めたことがわかっている(1940年10月～11月のわずか1か月間は主任代理)。また、1942(昭和17)年4月には、名古屋市昭和区萩原町にあった名古屋教区立「聖ヨハネ小神学院」の院長兼指導司祭となっている。

戦後1945(昭和20)年10月、シュタウブ神父は新発田教会に主任司祭として着任した。伝道婦の協力を得て若い改宗者が増えたそうである。また、1948(昭和23)年頃からは聖歌隊の指導に力を注ぎ、1950(昭和25)年8月27日(於：新発田市立図書館)にはその聖歌隊が「バッハ没200年記念音楽会」を開催、満員となり、収益の1万5千円を市の民生課へ寄付したという。

さて、シュタウブ神父の訳書『イエダマン：富者の最期』はこの新発田の地で書かれた。出版者が「聖母学院」とあるとおり、「聖母(洋裁)学院」のクリスマスの祝賀用として、加えて一般市民への布教用として、生徒の手を借りながら翻訳が進められた。生徒からは、厳しさの中にも優しさとユーモアを兼ね備えた神父として慕われており、教会では公教要理はもちろんのこと英語・ドイツ語の語学も教え、布教に努めていた。先の聖歌隊といい、本書が宗教劇の第4幕を題材にしたことといい、神父は芸術に造詣があったのだろう。1953(昭和28)年3月にはアメリカ留学のため転任し、その後の異動は不明だが、晩年は名古屋で専ら語学教育に励んだとのことである。享年84歳。

もうひとつ、本章の冒頭で示した「主に1930年代の出版に係る他の神父を」取り上げるとの原則からは大きく外れるが、シュタウブ神父が携わった労作について触れておかねばならない。それは『シュタウブ希和辞典』(リトン、2010)である。もとは神父自身のタイプ印刷により自費出版(1967年)されたものであるが、立教大学名誉教授竹内寛氏(故人)に活字化の意義を見出され、関係者の苦勞の末、2010年によりやく日の目を見ることとなった。神父も校正作業をされたが、残念ながら完成を見ずに帰天されている。1967年の元版時に書かれたであろう「まえがき」を読むだけでも、神父の真摯で謙虚な無私の人柄と人生が偲ばれ、仕事に限らず「献身的」「専心」「事にあたる」とはこういうことかと思わせるものである。

・『イエダマン：富者の最期』(ヘルマン・デイル著；アウグスチン・スタウブ訳)(新発田：聖母学院、1951)

(7) その他

●コンスタンティン・グドルフ神父(GUDDORF, Konstantin SVD., 1905-1985)

・『永遠の生命』(グドルフ著)(札幌：光明社、1939)

・『永遠の生命』(グドルフ著)(新潟：カトリック教會、1946)

●ヤコブ・グ rintゲス神父(GRUINTGES, Jacob SVD., 1900-1980)

・『イエズス・キリストの金言』(グ rintゲス編)(1935)

・『聖母のおすがた』(グ rintゲス著)(東京：日本姉妹會、1938)

●その他、神言会関連

・『四億人ノ信仰ハ』(山中巖彦著)(多治見：神言會修道院管區長フラッテン、1932)

・『祈禱集』(神言會編)(豊岡町(岐阜縣)：神言修道院、1937)

おわりに

冒頭で紹介した宣教神学校が1875(明治8)年に設立されて一年も経たないうちに、ヤンセン神父は自前の印刷所を開設した。1876(明治9)年1月、この初めての印刷所が引き渡されるにあたり、『Der Kleine Herz-Jesu-Bote(聖心の小使者)』誌に次のように書いているという。

「今日、印刷所は大きな力です。私たちの宣教神学校設立の道を切り開くためにこの雑誌が果たした役割こそが、良い実例でしょう。この雑誌なしでは、神学校は実現しなかったか、または実現してもこんなに早くには不可能だったことでしょう。」「印刷所を何に喩えることが出来るでしょうか。それは実に、霊的戦いに使われる刀に喩えることが出来ましょう。有意義な活動のためには、実力のある印刷所が必要です。刀は剣術士自らがもっているものであって、戦いが起こる度に借りてくるべき物ではないように、実力のある印刷所とは完全に私たちの所有物でなくてはなりません。」「宣教会というものは、その会員たちが宣教地で効率よく働くことができるように、要理教育書や祈祷書、そしてその他の印刷物を提供しなければなりません。そのことを理解するならば、宣教印刷所の効力は明らかです。」

宣教師による外国での布教のため、ヤンセン神父は印刷・出版に心を砕き、身を捧げていたことが確かに見て取れる。また、それだけでなく、「印刷所が一時間の間に千回も複製可能な、印刷された言葉を作り出すのは、何と力強いことか。しかし印刷物の量が問題なのではありません。決定的なことは、印刷された言葉が読まれ、そして心に刻まれることなのです」とも述べていたという。実際にこの言葉は、1878(明治11)年に創刊した二番目の雑誌『Stadt Gottes(神の国)』につながっていく。

「非宣教雑誌を利用することによって、神学校とその印刷所は、普通では接触できない読者層に、宣教の情報を届けることが可能となります。出版を検討するよう求められているこの挿し絵付き雑誌は、その目的のために大変ふさわしいものとなるでしょう」ともヤンセン神父は書いており、聖職者とそれを目指す者だけでなく、より広く人々の心に神の御言葉が浸透し、信仰生活を強められるよう、この雑誌を創刊したのであった。同誌はそのうちに第一の雑誌を凌ぐ読者を得て、シュタイルでの基幹事業となり、ドイツ中にカトリック家庭雑誌として知られるほどになった。雑誌名は2020(令和2)年9月に『Leben jetzt(人生は今)』と変更されたものの現在まで続いており、それだけ人々に愛されているという証拠であろう。

(以上、『Arnold Janssen : 1837-1909 : 写真と資料でみる「御言葉の使者」の生涯』より再引用)



神言会ローマ総本部

ここまで紹介してきた、また紹介しきれなかった数多の神言会神父の努力により、日本においても出版活動とそれによる布教が綿々と続けられてきたことの一端を、心に留めていただけたら幸いである。

創立から150年経った今日の神言会ローマ総本部では、SNSなどで発信するための本格的なスタジオ設備が整えられている。印刷・出版とは別のかたちにはなったが、ヤンセン神父の意志と情熱の本質は確実に引き継がれ、神の御言葉の伝達に心血が注がれている。

以上、神言会創立150周年の年に

*引用は、特段のことわりのない限り、『神言修道会来日百周年記念誌(1907年-2007年)』が出所となる。また、引用において、旧字は新字に改めた。

*本稿の執筆にあたり、各種調査および文献入手においては、当館参考業務担当者の労に負うところが大きい。記して謝意を伝えたい。

*本稿の対象とした時期に神言会神父が携わった出版物の一覧を、後日当館Webページに掲載する予定である。

【引用・参考文献】

●論文・記事

- ・「書家・高橋松韻と修道士・アントン・チェスカ：パチカン図書館収蔵、高橋松韻関連史料を巡る問題」小川仁(KU-ORCAS)が開くデジタル化時代の東アジア文化研究, 2022) p.307-316
- ・「カトリック出版界の軌跡：昭和前期(大15-昭20)を中心に」鈴木高明(藤女子大学・藤女子短期大学紀要. 第1部) 28, p181-219(1991.2)
- ・「山形カトリック教会墓地：そのイバラの道」高田得吉(だうねす：山形カトリック教会誌) 1, p.78-96(1982.9)
- ・「独逸に於ける現代のカトリック文学」(カトリック) 19(2), p.28-33(1939)

- ・「書物展望」(聲)745, p.66-67(1938.2)
- ・「APPENDIX : KODOMO NO MOHOSHIN」(Actio missionaria)27(1937.10)
- ・「神言会創立者アーノルド・ヤンセン師とその出版事業の精神」吉祥寺山人(聲)731, p.47-51(1936.12)
- ・「海のうち：岐阜天使幼稚園の母の日」(聲)666, p.491(1931.7)

●資料

- ・水垣清著『岐阜キリスト教史：日本伝道覚書』(教文館, 2024)
- ・『カトリック山形教会100年史：1900-2000』(カトリック山形教会, 2021)
- ・『神言修道会来日百周年記念誌(1907年-2007年)』(神言修道会日本管区長永山誠, 2015)
- ・『カトリック新発田教会：宣教135年のあゆみ』(新潟教区・カトリック新発田教会, 2011)
- ・『鶴岡カトリック教会歴代司祭のアルバム：献堂100周年記念1903～2003』(鶴岡カトリック教会, [2003?])
- ・『新カトリック大事典』第3巻(研究社, 2002)
- ・『ナーベルフェルト神父が遺したもの：武蔵野の良寛さん：カトリック吉祥寺教会初代主任司祭(1948年から1957年)』([カトリック吉祥寺教会], [2000])
- ・Franz-Josef Eilers, Heinz Helf [著]; 菊地功訳『Arnold Janssen : 1837-1909 : 写真と資料でみる「御言葉の使者」の生涯』(神言修道会日本管区, [1996])
- ・萩原泉編著『神の子羊：鶴岡カトリック教会略史』(鶴岡カトリック教会, 1996)
- ・新潟県プロテスタント史研究会編『新潟県キリスト教史』下巻(新潟日報事業社出版部, 1994)
- ・『サウエルボルン神父様を偲んで』(高田カトリック教会, 1989)
- ・『秋田カトリック教会創立百周年記念誌：飛躍100年』(秋田カトリック教会, 1984)
- ・萩原泉編『鶴岡カトリック教会天主堂八十年のめぐみ：献堂八十周年記念誌』(鶴岡カトリック教会, 1983)
- ・萩原泉著『鶴岡カトリック教会天主堂ものがたり：重要文化財・明治ロマネスク建築の記念碑』(東北出版企画, 1979)
- ・『新潟カトリック教会百年の歩み：聖堂献堂50周年を祝して』(新潟カトリック教会, 1977)
- ・青山玄著『新潟教区宣教小史：新潟教区創立60周年記念』(カトリック新潟教区, 1972)
- ・五味巖等編『素顔の名古屋教区』(松岡司教の司祭叙階五十年「記念事業会」, 1968)
- ・ブンスマン [編]『彌撒聖式』(聖ヨハネ會, 1936)
- ・岐阜県教育会編『岐阜県大地理』(岐阜県教育会, 1935)
- ・農商務省商工局工務課編『工場通覧大正10年11月』日本工業倶楽部(1919-1922)
国立国会図書館デジタルコレクション(参照2025-9-26)
- ・マトン著『ルードの出来事：奇妙なる出現及び平癒』(マトン, 1912)

(石田 昌久、加藤 富美、伊藤 禄美、君山 三紀)

「カトリック文庫」

「カトリック文庫」では、近代日本におけるキリスト教史の研究に資する資料群の構築を目的として、明治・大正・昭和初期のキリスト教関係出版物等を収集しています。これまで、聖書、祈祷書、聖歌集、要理書およびそれらの解説書、布教資料、聖人伝などを、多くの皆さまからご寄贈いただきました。この場を借りて、心よりお礼を申し上げます。また、従来からの資料に加えまして、お手元に教会・修道会史資料(教会・修道会刊行物)などがございましたら、引き続きご寄贈を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

南山大学ライネルス中央図書館カトリック文庫通信

カトリコス No.40 2025.11.1発行

編集・発行：カトリック文庫グループ

〒466-8673 名古屋市昭和区山里町18 Phone : 052(832)3163 / Fax : 052(832)3462

* 図書館Webページでもご覧いただけます。

<https://office.nanzan.ac.jp/library/catholicbunko/>